

越谷
40



越谷
40

越谷市制40周年記念行事

越谷市郷土研究会主催

第252回 史跡めぐり

特別付録

『庚申信仰と庚申塔』

(無断転載を禁じます)

越谷市郷土研究会 理事 加藤 幸一

庚申信仰と庚申塔

越谷市郷土研究会理事 加藤 幸一

一、庚申塔とは何か、庚申信仰の記念として建てられた人間の体の中に潜んでいる三尸(さんし)と言われる上尸(じょうし)・中尸(ちゅうし)・下尸(げし)の三匹の尸虫(しちゅう)が、六十日に一度やってくる干支の庚申の日の夜に、(さんしちゅう)が、六十日に一度やってくる干支の庚申の日の夜に、人の睡眠中に口から抜け出して天に昇り、その人が日頃犯した罪を天の神に暴く。するとその報告をもとに判断して生命を奪ったり、若死にさせたりする。それゆえ庚申の日の夜は三尸虫が身体から抜け出る機会を与えないように寝てはならないという。そこで、庚申講の仲間達が一堂に会し、徹夜して過ごす『庚申待(ごうしんまち)』という行事が行われる。『待(まち)』とは、「まつり」が転化したと言う説や「待つ」という動詞が名詞形になったとの説がある。その庚申待の記念として建立された石塔が庚申塔という訳である。庚申塔は道端や辻、寺社の敷地内、墓地、個人の屋敷内等に建てられた。江戸時代には庚申信仰は全国津々浦々で庶民の間で盛んに行われ、庚申塔も沖縄県と種子島を除く北は北海道の礼文島(れぶんとう)から南は鹿児島県の竹島(たけしま)や悪石島(あくせきとう)まで建立された。しかし明治に入ると庚申信仰は仏教関係の行事として廃仏毀釈(はいぶつきしゃく)のおおりを受けてか急に衰え、庚申塔の建立もほとんど見られなくなった。

十干十一支(じっかんじゅうにし)として庚申(かのえさる)よく今年の干支(えと)は何年かとか、生まれは何年かなどと今でも十二支が使われている。十二支とは

子(ね・シ)、丑(うし・チュウ)、寅(とら・イン)、卯(う・ポウ)、辰(たつ・シン)、巳(み・シ)、午(うま・ゴ)、未(ひつじ・ビ)、申(さる・シン)、酉(とり・ユウ)、戌(いぬ・ジュツ)、亥(い・ガイ)

をいうのはご存じの通りである。これに十干(じっかん)である

甲(きのえ・コウ)、乙(きのと・オツ)、十干十二支として組み合わせせて読むときは「イツ」、丙(ひのえ・ヘイ)、丁(ひのと・テイ)、戊(つちのえ・ポ)、己(つちのと・キ)、庚(かのえ・コウ)、

辛（かのと・シン）、壬（みずのえ・ジン）、癸（みずのと・キ）を組み合わせたものが十干十二支、つまり干支（カンシ・えと）と呼ばれる。現代では干支（えと）という十二支のみをさしている。干支の組み合わせは、

甲子（きのえね・カッシ）、コウシとは言わない）、乙丑（きのとうし・イッチュウ、オツチュウとは言わない）、丙寅（ひのえとら・ヘイイン）、丁卯（ひのとう・テイボウ）、戊辰（つちのえたつ・ホシン）、己巳（つちのとみ・キシ）、庚午（かのえうま・コウゴ）、辛未（かのとひつじ・シンビ）、壬申（みずのえさる・ジンシン）、癸酉（みずのととり・キユウ）、甲戌（きのえいぬ・コウジュツ）、乙亥（きのとい・イツガイ、オツガイとは言わない）、丙子（ひのえね・ヘイシ）・・・

と言うようにしていく。十干と十二支の組み合わせは全部で六十通りとなる。これで年や日をあらわした。これによると甲子から始めると六十回目に癸亥（みずのとい・キガイ）となり、一巡して六十一回目に再び甲子（きのえね・カッシ）に戻る。庚申（かのえさる・コウシン）の年や日も六十年や六十日ごとに一度やってくるのである。それゆえ数え年で六十一才（満六十才）を迎えて還暦の祝いをするのは生まれてから干支が一巡したことを意味している。

一・ 代表的な庚申塔の型式 〳 日月・青面金剛・二鶏・三猿

寛文年間（一六六一〜一六七二）頃から庚申塔の建立が目立ち始めると同時に、青面金剛と呼ばれる仏様を描いた庚申塔がよく見られるようになる。そして元禄年間（一六八八〜一七〇三）の頃になると、庚申塔建立の大ブームとなり、この頃、『日月（にちげつ）・青面金剛（せいめんこんこう）・二鶏（にけい）・三猿（さんえん）』の型式が完成する。つまり中央に青面金剛像、上部の左右に日月（太陽と月）、下部に三猿が刻まれ、中には青面金剛の両側下に二鶏が刻まれていることもある。庚申様と言うと青面金剛を一般に指すようになるのもこの頃である。青面金剛は怒りを込めた顔付きで、腕が六本もあって、そのうち四本の手には左右にそれぞれ弓と矢、輪宝（りんぼう）・車輪の形をして八方に矛先がでている）と矛を持ち、中央二本の手は合掌している。また、右手に剣、左に羅索（けんじゃく）・一種の綱）を持つものもあり、中に

は絹索の代わりに女性の髪の毛をつかまえて、その女性をぶら下げているものもある。

青面金剛は本来伝尸（でんし・結核）を防ぐ仏様であるが、庚申信仰の三尸退治と結び付いて庚申信仰の主尊となったのである。

ア・日月

日月は初期の庚申塔にはあまり見られないが、後になるとかなり多く見られるようになる。向かって右側が日（太陽）、左側が月が一般的である。そして両者の区別が判別しやすすいように日は円形、月は三日月として描かれていることが多い。しかし、日月が共に円形に描かれたり、日月の位置が左右逆のものもある。日月は初期の庚申塔にはあまり見られない。

なぜ庚申塔に日月が描かれるようになったかよくわかっていないが、中世に盛んであった日待（ひまち）・月待（つきまち）の影響を受けたのであるとか、日月は徹夜を表わすために描かれるようになったとか考えられている。

イ・鬼

青面金剛に踏みつぶされている鬼は、四天王像に踏みつぶされている鬼である天邪鬼（あまのじゃく）から連想して描かれたと考えられている。

ウ・一鶏

鶏は古来から時（夜明）を告げる神聖な鳥とされていたのであるが、鶏が描かれるようになった理由は、庚申待の行事で徹夜した翌朝が酉の日であるからと考えられている。そして鶏が鳴くと夜が明けたと解して庚申待の講を解散するところもあったのである。一方、鶏は青面金剛の使者であるとの俗説もみられた。

二鶏が描かれていない庚申塔も見られ、また描かれていても線刻で何の鳥かわからない程ごく簡単に描かれているものも多く見られる。

エ・二猿

山の神ともされている猿は山王権現（さんのうごんげん・山王様）の使者とされ、山王信仰の象徴となっていた。この山王権現の猿が庚申の「申」と結び付いて庚申信仰にはいつてきたと推定されている。そのよい例として申待（さるまち）と刻まれた二十一仏板碑があげられる。

二十一仏は山王信仰の仏様たちである。

猿は江戸時代初期の庚申塔に早くも描かれてくるが、一猿や二猿のものが多く見られた。その後間もなく見ざる・聞かざる・言わざるの三猿形式に定まっていく。これは、日光東照宮にみられる見ざる・聞かざる・言わざるの三猿の考えが世の中に広まり、その影響が庚申塔に三猿として刻まれるようになったと考えられている。そして三猿の像が刻まれている石塔は必ずといってよいほど庚申塔であるといえるようになる。

二二・「陀羅尼集経」で説かれている青面金剛

この經典『陀羅尼集経』(だらにじっきょう)の「大青面金剛呪法」に説く青面金剛の姿・形とは碎けた表現で訳してみると次の通りである。身体には四本の腕があつて、上の左手には三股叉(さんこさ・原文は三叉戟「さんさげき」)を下の左手には棒を持ち上の右手には法輪を下の右手には羂索(けんじやく)を持つ。身体の色は青色で、口を大きく張って牙を上に出し、血のように真っ赤な目をして三つ目となっている。頭の上には鬘鬘を載せ、髪の毛は炎のように逆立っていて大蛇を巻き付かせている。両腕からは竜を一頭ずつぶら下げていて、それらの竜の頭は互いに向き合っている。腰には二匹の大きな赤蛇をまとっている。両脚や両腕にも同じく大きな赤蛇をまとっている。左手に持っている棒の上には大蛇が絡み付いている。虎の皮を股にゆったりとまとっている。鬘鬘の瓔珞(首飾り・胸飾り)を首に掛けている。

一身四手。左辺上手把三股叉。下手持棒。右辺上手掌拈一輪。下手持羂索。其身青色。面大張口。狗牙上出。眼赤如血面有三眼。

頂戴鬘鬘。頭髮聳堅如火焰色。頂纏大蛇。両腕各有倒懸一竜。竜頭相向。其像腰纏二大赤蛇。両脚腕上亦纏大赤蛇。所把棒上亦纏大蛇。虎皮纏膊。鬘鬘瓔珞。

また、青面金剛像に付随するものについて次のように続けて説いている。青面金剛像の両脚の足下にはそれぞれ鬼を踏み潰している。その像の左右両辺に、各々一人の青衣の童子を作る。髪の毛は揚げ巻きにし、手には香炉を持つ。その像の右辺に二人の夜叉(やしや・業叉)を作る。一つは赤、一つは黄、刀を執り索を執る。その像の左辺に二人の夜叉を作る。一つは白、一つは黒。(ほこ・馬上で持つ短めの矛)を執り、又(さすまた)を執る。形状はどれも恐ろしい。手足の爪は長く鋭い。

実際の庚申塔に描かれている青面金剛の図柄は、以上のように陀羅尼

集経に説かれた図柄とは違いが大きい。

四・庚申信仰の起こり　→奈良時代頃から

わが国の庚申信仰は平安時代にすでに始まっていたことが文献からわかる。

庚申信仰のことが記録上初めて出てくるのは比叡山延暦寺の円仁（えんにん・天台宗山門派の祖）の『入唐求法巡礼行記（にっとうくほうじゆんれいこうき）』である。承和五年（八三八）十一月二十六日の記事の中に「正月庚申」と出てくる。このころ既に貴族の間で正月の庚申の夜に庚申信仰の徹宵行事である『守庚申（しゅこうしん・まもりこうしん）』を行っていたのであろう。

中国の道教が日本に伝来したのは八世紀初期にさかのぼると推定されている。わが国の庚申信仰は道教の三尸（さんし）説の影響を受けたものである。それゆえ、八世紀中頃、奈良時代に貴族社会の間で始められたと考えられている。

五・平安時代の貴族の庚申信仰　→守庚申

この頃の宮中や貴族の間で広まった庚申信仰の行事の『守庚申』（しゅこうしん）を『御庚申御遊（おこうしんおあそび）』『御庚申』等と称していた。詩歌管弦の遊びなどをして庚申の夜を明かしたのであろう。

なお、宮中での『守庚申』の内容が『庚申信仰』（平野実著、角川書店）のp二二に紹介され、また『栄華物語』の花山の巻の中にも『正月庚申』の行事についても紹介されている。

当時は宮中や貴族たち、さらにその下の身分の者までもが各自自分の家で守庚申を行っていたのであろう。

六・鎌倉時代の武士の庚申信仰　→武家の間にも広まる

守庚申は貴族の間だけでなく、武士の間にも広まっていったと推定される。『吾妻鏡（あずまかがみ）』に建暦三年（一一二二）三月大十九日、「庚申、天晴、今夜御所で庚申を守られる御会あり。一とある。京風を尊ぶ三代將軍源実朝の時である。すでに実朝の頃に守庚申が武士の間で行われ始めていたのであろう。

七・室町時代の庶民の庚申信仰（庶民の間にも広まる）
庚申信仰は貴族や武士だけではなく一般庶民の間にも広がっていき、その行事を『申待（さるまち）』と呼ばれていたようである。申待とは、甲子待（きのえねまち）を子待（ねまち）と省略するように、『庚申待（かのえさるまち・コウシンまち）』を略した名称である。申待という言葉は文献では『親俊日記』に天文七年（一五三八）六月十八日の条に見られ、石造物では申待板碑に見られる。庚申待（申待）板碑については次に説明する。

八・庚申石造物としてはわが国最初の『申待板碑』

庚申信仰の行事である申待の文字が当時の板碑にも見られ始めてきた。つまり『申待板碑』である。

ア・わが国最古の庚申石造物

わが国最初の『申待板碑』は、東京都練馬区春日町の長享二年（一四八八）の一申待板碑一である。これが現存するわが国最古の庚申石造物と言えよう。その板碑には上部に主尊の梵字マン（文珠菩薩、一説にはここに刻まれているマンは文珠菩薩でなく不動明王であるとの主張もみられる）と次の銘文が刻まれている。

融秀阿闍梨 道弥門 与一五郎 右馬五郎
与一三郎 六郎三郎 長享二年
梵字マン 奉申待供養結衆 彦八 戊申
弥右太郎 又二郎 十月廿九日
右衛門四郎 助六 平次五郎 孫八 平六

『奉申待供養結衆』の中に「申待」と「結衆」の文字がみられる。「結衆（けっしゅ）」は後の江戸時代の寛文年間（一六六一〜一六七二）頃から一講中（こうじゅう）」とも呼ばれるようになり、その後「講中」となる。

梵字のマン種子（しゅじ）は一般的には文珠菩薩を意味するが、ここでは不動明王との説もある。

融秀阿闍梨の名は村人たちに庚申信仰の功德を説いた僧侶であろう。

イ・埼玉県三郷市の申待板碑

三郷市の長享三年（一四八九）の申待板碑は板橋区の現存する最古の申待板碑よりもわずか一年新しいものである。主尊が蓮座（れんざ）にのった阿弥陀一尊で、その上に天蓋（てんがい）と日月とがある。下方の両側には梵字で光明真言（こうみやうしんごん）を刻み、その外側に秀快以下十三人の名が刻まれている。中央の三具足（みつぐそく）をのせた机の下に『奉申待供養』とある。

ウ・埼玉県越谷市内の庚申待板碑（越谷市金石資料集による）

天文二十一年（一五五二） 図像阿弥陀三尊板碑

「奉庚申待供養」と刻まれる

西方（にしかた）日枝（ひえ）神社

天文二十二年（一五五三） 図像阿弥陀三尊板碑

「奉庚申待供養」と刻まれる

東方（ひがしかた）仲立墓地

天文二十三年（一五五四） 十三仏板碑（主尊は種子バクの釈迦）

十三仏とは不動明王（法事では初七日）に始まって虚空蔵菩薩（三十三回忌）までの十三仏

「奉庚申待供養」と刻まれる

西方田向（たむかい）墓地

天正二年（一五七四） 釈迦三尊種子板碑

「申待供養」と刻まれる

中島道路端

天正三年（一五七五） 二十一仏板碑（主尊はタラークの虚空蔵）

二十一仏とは比叡山の山王（さんのう）

二十一社の本地仏

「申待供養」と刻まれる

増森（ましもり）薬師堂

小島氏「家内記録帳」に記載あり

県指定文化財

天正三年（一五七五） 二十一仏板碑（主尊はバクの釈迦）

「申待供養」と刻まれる

天正三年（一五七五）

東小林（現、東越谷）浜野博一氏所蔵

二十一仏板碑（主尊はバクの釈迦）

「申待供養」と刻まれる

千疋（せんびき）東養寺

九

室町時代末期の板碑から塔へ変遷の開始　　庚申塔の出現　

板碑の製作は室町時代末期になると急に衰え、江戸時代初期には全く作られなくなる。板碑の一種である申待板碑も同様なことが言える。

室町時代末期は申待板碑の衰微にともない、代わって庚申塔が出現してくる。主に自然石に『奉庚申待供養』などと文字が刻まれた庚申塔である。

十

江戸時代初期の庚申塔　　主尊はまだ一定していない　

江戸時代にはいると板碑は全く消滅し、当然庚申待板碑も製作されていない。庚申塔が庚申待板碑にとって代わられている。

江戸時代初期の庚申塔は板碑型が多く見られ、過半数を占めている。庚申待板碑の影響であろう。

庚申塔の主尊は、阿弥陀如来（阿弥陀三尊も含む）や地藏菩薩が多くみられる。それぞれ約三割程度である。その他の主尊として、薬師如来、大日（だいにち）如来など様々である。このように庚申塔の主尊はまだ一定していない。つまり庚申様は誰なのかまだはっきりと決まっていないのである。

室町時代に庚申信仰が僧侶や修験者（しゅげんじゃ）などを通して庶民の間に広まっていくと、いつのころからか庚申の夜に神仏を拜むようになり、その時の神仏はこれと言って定まっておらず、阿弥陀様であったり、地藏様であったり、大日様であったりしたのであろう。これが江戸時代初期まで続いてきたのである。

十一

江戸時代寛文年間の庚申塔ブーム　　青面金剛の出現　

寛文年間（一六六一～一六七二）になると庚申塔が盛んに造立されるようになる。そしてその主尊として青面金剛像と呼ばれる仏様が描かれたり、その種子であるウン（梵字）が刻まれたりするようになる。つまりこの頃になると主尊は阿弥陀如来や地藏菩薩だけでなく青面金剛が見

られ始めたのである。寛文年間以前の青面金剛は珍しい。

庚申信仰で青面金剛が主尊になった理由は、陀羅尼集経に出ている青面金剛が伝戸（でんし）の病（今で言う肺結核）を治す仏様であったが、この伝戸と庚申信仰の三戸との語呂が似ているために庚申信仰と結び付き主尊になったと思われる。

塔型も板碑型の他に笠付き型の庚申塔も多く見られ始めるのである。

十一一・元禄年間の庚申塔ブーム　　〱日月・青面金剛・二鶏・三猿〱
元禄年間（一六八八〱一七〇四）は庚申塔造立の最盛期となる。主尊は多くは青面金剛となる。そして庚申様は青面金剛だとの考えが定着する。青面金剛は二手・四手などもあるが、六手が圧倒的に多い。こうして『日月・青面金剛・二鶏・三猿』の基本形が完成し、庚申塔造立の大ブームが始まるのである。

また、この頃から庚申塔が道端や辻などによく建てられるようになる。道しるべを兼ねる庚申塔もでてくるようになる。越谷市内では西方三五三一の葛西用水取水口にある享保八年（一七二三）の庚申塔が道しるべを兼ねた庚申塔としては最も古い。

一二二・江戸時代中期から末期の庚申塔

ア・文字字庄庚申塔

像容を刻まずに、ただ『庚申』『庚申塔』『青面金剛』というように文字のみしか刻まない文字庚申塔が見られ、末期になるに従って増加していく。いわば手抜き庚申塔といえよか。

なお、関東では自然石に刻まれた文字庚申塔もよく見られる。

イ・百庚申

数にものをいわせ、たくさん作ればそれだけ多くの功德もあろうかと百観音・五百羅漢・千体地藏等が見られるが、庚申信仰もその影響を受けていて例外ではない。それが百庚申である。百基の庚申塔を造立して功德を得ようとしたのである。寛政十二年（一八〇〇）の庚申の年から始まったと推定されている。越谷市内では、相模町六丁目の大聖寺（たししょうじ）にある天保六年（一八三五）の百基（現存は九十七基）の庚申塔とそれらを統括し供養する天保九年（一八三八）の百庚申供養塔がある。

十四・その他の主尊の庚申塔

ア・猿田彦と庚申

猿田彦命（さるだひこのみこと）とは天孫が降臨するときの道案内をした神である。つまり、天孫ニギノミコトが高天原（たかまがはら）から葦原中国（あしはらのなかつくに）の日向国（ひゅうがのくに）高千穂（たかちほ）の峰（みね）に降りてこられる途中の天界からの分かれ道である天八衢（あまのやちまた）にいて、そこから葦原中国への道案内をしたという。「八衢」とは「八つの道（ち）の股」という意味。「八一」は数が多いことをさしている。

神道の猿田彦を庚申信仰の主尊にかつぎ出したのは江戸時代前期の儒学者山崎闇斎（あんさい・一六一八〜一六八二）であると考えられている。山崎闇斎は垂加神道（すいかしんとう・垂加とは闇斎の別号）を興した人でもある。

猿田彦の庚申塔で最古のものと思われるのが埼玉県三郷市にある。寛文九年（一六六九）板碑型の石塔で、中央に「申田彦大神」と刻まれている文字庚申塔である。

猿田彦の庚申塔は江戸時代初期のものは大変珍しく、江戸時代末期に造立されたものが多い。

越谷市内には猿田彦の庚申塔は「越谷市金石資料集」によると二十一基程ある（明治以降の庚申塔二基を含む）。すべて文字「猿田彦大神（おおかみ）」（一基のみ「猿田毘古大神」と刻まれた石塔である。明和五年（一七六八）が最も古く、次は文化四年（一八〇七）となり、江戸時代後期に多く見られている。

イ・柴又の帝釈天と庚申信仰

安永八年（一七七九）に、江戸郊外の柴又村（現、葛飾区柴又町）の日蓮宗の寺院題経寺（柴又の帝釈天）で、本堂を改修したとき偶然屋根裏から帝釈天の仏像を刻んだと思われる木版を発見。その日が庚申の日であったと言う。帝釈天は一説に人々を救うために青面金剛を下界に遣わしたとされている。この帝釈天と当時大流行であった庚申信仰と結び付き、江戸の人々の人気を集め、多くの人々が柴又もうでにやって来るようになったのである。

ウ・富士講と孝心塔

小谷三志は富士講を不二道孝心講という一派を組織して富士講を広めて言ったが、この時「孝心」の大切なことを説き広めた。「孝心」と「庚申」の音が同じことから、この影響が庚申塔にも見られることもある。庚申塔の上部に富士山の姿を描いたり、「孝心」という文字が刻まれていたりするのがそうである。越谷市内では、向畑（むこうばたけ）の観音堂にある明治二年（一八六九）の庚申塔に「孝心で庚申さまをよくおがめねむりての身はすぐにかうしん」と刻まれている。

エ・塞神（さえのかみ）塔と庚申

『日本石仏事典』（庚申懇話会編、雄山閣発行）の「塞神塔」の項で荒井広祐（ひろすけ）氏は次のように解説している。

サエノカミは通例、道祖神（どうそじん）・幸神（さいのかみ）・歳神（さいのかみ）・賽神（さいのかみ）・障神（さいのかみ）などと記される。「塞神」の字を当てたのは江戸末期の国学者平田篤胤である。彼は、当時盛んであった庚申信仰を、復古神道（しんとう）の立場からこれを平安初期の延喜式四時祭の一つである道饗祭（みちあえのまつり）に比定した。道饗祭とは外から侵入する妖魅悪神を塞ぎ給う八衢比古（やちまたひこ）・八衢比売（やちまたひめ）・久那斗（くなど）の塞神三柱を祀って京都の守護を祈願する祭儀である。篤胤は庚申待を廃して六月と十二月に道饗祭を行うこと、庚申塔造立の際は塞神三柱の御名を彫り付けることを彼の著書である『玉だすき』のなかで提言している。『玉だすき』の校者は「師のかく教諭さるゝも既に数年に成りぬれば、心ある人々は一速く塞神三柱の御名にかき改めて立てたるも数所出来にたり」と追記している。『玉だすき』の草稿は文化八年（一八一）になるから、おそくも文政年間（一八一八〜三〇）には塞神塔の造立が見られたものと思われる。

（途中、省略する）

在来の庚申塔の表面を削除して「塞神」の文字を刻んだ塞神塔が埼玉県行田市周辺に多い。行田市の庚申塔の三分の一は塞神塔に改造されている。これらは明治初年に忍藩（おしはん）の行った神仏分離政策の落とし子であり、全国的に見ても特異な存在である。これら一連の塞神塔は年紀銘が在来のままであったためか、従来改刻に気付かれずにいたものである。（以下、省略する）

なお、越谷市内では忍藩の飛び地であった柿木領八ヶ村の見田方地区に改刻塞神塔が見られる。「越谷市金石資料集」一四三ページの一行目を参照のこと。

十五・江戸時代の庚申待

庚申講の講中（こうじゅう）たちが庚申の日の夜、当番に当たった家に集まって来る。番に当たった家では、まえもって床の間を清め、そこに青面金剛や三猿などが描かれた庚申掛け軸を掛け、灯明や花・線香・お供物（くもつ）などを供えた。

この掛け軸の前に集まった講中の人々は、庚申掛け軸に向けて一斉にお経を読んだりする。僧侶をわざわざ招いて呪文やら般若心経を唱えてもらうこともある。それが終わると講中一同がごちそうを食べたり、お酒を飲んだりして世間話に花を咲かせて徹夜して楽しく過ごすのである。呪文としては庚申の真言（しんごん）があげられる。地域によって多少の違いがあるが「オコーシンデ、コーシンデ、マイタリ、マイタリ、ソワカー（津軽地方）、地方によっては一オコーシンテイ」、「マイトリ」などともいう。庚申待に参加できるのは男子のみで、女子は月経や出産があるため汚らわしいとされて講に立ち入ることを禁止されていたのが一般的である。例外もあるが、このように庚申講は男子のみの講であるといえる。庚申待の行事は娯楽的な性格の強いもので、時には酒を飲んではか騒ぎしたり、博打をこっそりとやるところもあった。庚申待は娯楽機関の発達していなかった当時の人々の楽しみの一つであった。

なお、掛け軸は猿田彦を主尊としている講中は猿田彦大神、帝釈天を主尊としているところは帝釈天が表されている。青面金剛や帝釈天は仏教的な庚申待となるが、猿田彦の場合は神道的な庚申待となる。

十六・青面金剛のご利益と禁忌

青面金剛の御利益（ごりやく）としては、定朝（じょうちょう）作と言われる「青面金剛上師十誓願」を紹介する。

青面金剛上師十誓願

式 願福徳者可令得福徳

式 願智恵者可令得智恵

- 三 願官位者可令得宦位
- 四 願長命者可令得長命
- 五 願愛敬者可令得愛敬
- 六 願子孫者可令得子孫繁昌
- 七 願眷属者可令得眷属衆多
- 八 願防火盜者可令得火盜雙除
- 九 願諸病悉除者可令得諸病悉除
- 十 願仏果菩提者可令得仏果菩提

背面金剛上師十誓願が刻まれた石碑が越谷市内に残っている。相模町七丁目にある福寿院跡地に天保九年（一八三八）に造立された自然石の石碑である。

禁忌としては、庚申の夜に男女がとも寝してはいけないとか、庚申の日には女子は裁ち物をしてはいけない、夜なべをしてはいけない、おはぐろをつけてはいけない、出産のあった家で講をしてはいけない、などが見られた。

また、庚申の夜に不義密通したり、盗みをしたりすると必ず露見すると言われた。

庚申の夜に男女がとも寝して性行為してはいけない理由は、この日にもし妊娠すると生まれてくる子は盗人になるといわれているからである。大盗賊で有名な石川五右衛門（ごえもん）を生んだ親は、庚申の夜を忘れてとも寝したためとか、五右衛門は申年の申の日の申の刻に生まれたとか、庚申の日に生まれたとの俗説が見られた。

庚申の日に生まれるのがよくないとする地方では、庚申の日に生まれた子を形式的に捨て子をするところもある。また、将来盗賊にならないようにと男子なら銀之助・鉄太郎など、女子ならおかね・おぎんなどと名前に金に関係のある文字を添えたりした。夏目漱石の本名は夏目金之助であるが、これは慶応三年一月五日の庚申の日に生まれたためである。

十七七・庚申と七

庚申と七の数字は縁がある。庚申様に供える七色菓子（全部で七色をそろえた七種類菓子、実際には七種類の菓子）、七人で庚申講を組織し、また七人で庚申塔を造立する、七カ所の庚申塔や庚申堂を巡る七庚申参りなどがみられた。

一八・女子の庚申講

庚申講は一般には男子のみで構成されるが、例外として女子のみからなる庚申講が越谷市内で見られるので、次にその庚申塔を紹介する。
三野宮の一乗院の参道にある天保四年（一八三三）の庚申塔にはすべて女性の名前が刻まれている。世話人も女性である。次の通りである。

〔左側面〕

〔台石〕

天保四癸巳正月吉日

世話人

坂巻内きよ
須賀内ほの
同々せき
倉橋々ふち
金子々ゆり
同々はる
尾崎々とみ
根岸々さき
同々しし
坂巻々ひさ
同々のおよ
鈴木々よし

〔正面〕

（日月）青一面金剛（三猿）

〔右側面〕

三ノ宮村

講中

〔台石〕
尾崎内かう
坂巻々そて
榎本々まつ
坂巻々てつ
同々はつ
同々きん
同々みよ
同々さん
森田々さん
同々かん
同々この
小嶋々まつ

※主に参考にした書籍は平野実著『庚申信仰』、練馬区教育委員会発行
『庚申塔』、板橋区教育委員会発行『庚申塔』

